

米国とエア・パワー¹

ベンジャミン・S・ランベス

1991年の「砂漠の嵐作戦」で、米国のエア・パワーが多国籍空軍に支援され、サダム・フセインの軍隊を撃破し、イラク部隊をクウェートから追い出す際に重要な役割を演じたとき、主要な軍事作戦の経過と結果を左右するとされるエア・パワーの有する能力に対する懐疑派は、この驚くべき偉業を1つの例外として片付ける傾向があった。懐疑派は、「地上軍」が決定的な軍事的勝利を収めることができたのは、果てしなく続き、障害物がない砂漠の環境や極めて脆弱なイラクの機甲部隊、あるいはペルシャ湾岸戦争を一般原則の例外とした地理的・作戦的状況が理由であると述べていた。

湾岸戦争におけるエア・パワーの貢献が実際に並外れた、前例のない歴史的な偉業だったので、多くの者にとってこの反論には信憑性があった。しかし、1991年の湾岸戦争に続く12年間、NATOによる1995年の「デリベレート・フォース作戦」と1999年の「同盟の力作戦」におけるバルカン半島でのセルビアとの2回の対決に始まり、21世紀の大きな戦争である2001年から翌年にかけてのアフガニスタンのテロ勢力に対する「不朽の自由作戦」、及びサダム・フセインの支配を終わらせた2003年の「イラク解放作戦」での3週間にわたる大規模戦闘までの極端に異なる連続した4つのケースで、世界は米国主導の連合軍のエア・パワーが何度も同様な方法で勝ち続けるのを見せ付けられた。勿論、「砂漠の嵐作戦」以降の5つのケースにおいて、究極の結果を左右したのは米国のエア・パワーだけではない。しかし、各々のケースで、米国のエア・パワーが、比較的少ない友軍兵の犠牲と装備の損失で功を奏する結果をもたらした極めて重要な戦力要素であったとすることができる。それらの成果に照らして見ると、米国の航空宇宙戦力が繰り返し示したものは、間違いなく例外の連続ではなく、航空兵器が質的に新しくかつ過去に経験したもの以上に優れた高度な能力を示す武力行使の新しい傾向である。この武力行使の新しい傾向は今では、米国はその軍事志向、能力、優先作戦方法で世界の先進国中でも独特な「エア・パワー国家」と呼ぶことができるほど、恒常的で顕著なものとなった。

国際情勢の専門家である戦略家であるコリン・グレイはこの点に関して、「砂漠の嵐作戦」以降に米国がエア・パワーで達成した一連の成果以前から、「米国は、歴史上のいかなる

¹ この論文は、防衛庁防衛研究所の主催で2005年9月14～15日に開催された「戦争史研究国際フォーラム」での発表のために作成された。この論文に含まれる見解はすべて筆者の見解で、ランド研究所の公式見解、あるいは政府もしくは民間研究スポンサーの意見を反映するものではない。

国も主張できない程のエア・パワー国家である」と明言した²。グレイはこの独創的な意見のインスピレーションを、湾岸戦争の勝利の余韻にあった、米空軍退役大佐ジョン・ウォーデンの思慮深い主張から受けた。それは、エア・パワーができるだけ少ない友軍兵の犠牲で敵を圧倒する機動力を有することと、先端技術における米国の競争力を運用する実証された能力に基づく「典型的な米国の戦争形態」であることであった³。この概念を練る際に、グレイは「米国のエア・パワーは米国のシー・パワーと違って、自然発生的である」ことを示唆した。彼はさらに、湾岸戦争の例が示すように、「米国のあらゆる軍事作戦におけるエア・パワーの貢献は、伝統的に独特なランド・パワーとシー・パワーの概念に疑いをはさむほどになった」と提言した。グレイは、米国の工学的手法、性急さ、そして最終的には遅ればせながらの大規模な武力行使に訴える傾向などのような、米国の戦略的風土の独特な面とエア・パワーが両立するよう見える理由に言及し、米国に特有なものであるが、「航空宇宙戦力が戦略的主役を演じる能力を有し、演じることが許されるような紛争では、そのような部隊は勝利を収め、中心的な役割を演ずることが可能である」と結論付けた⁴。

上述したエア・パワーの最近の一連の成功以前でも、米国は、エア・パワーの開発で現在利用されている最先端技術の研究の本拠地であったことは、多くのオブザーバーにとって明白なことであった。一例を挙げると、F-117、B-2、F/A-22などの軍用機に現在搭載されているような高性能ステルス応用技術を求める余裕があるのは米国だけである。確かに、ソ連も冷戦絶頂期の一時、投資レベルと現役軍用機及び戦闘支援機の機数の面だけだが、ある意味では「エア・パワー国家」と、明確ではないが間違いなく呼ぶことができた。ソ連は、1912年の世界初の多発エンジン爆撃機の実戦配備まで遡る軍用航空を他に先駆け開拓した誇り高き長い伝統を持つと堂々と主張できるであろう。最後のソ連空軍司令長官だったダイネキン将軍は、機会あるごとに「翼のないロシアはロシアではないし、ロシアは昔も今も、そして今後も翼を持つ」と話すのが好きだった⁵。しかし、その後のソ連崩壊後の数年の間に、大幅に縮小されたロシア空軍の自慢のソ連空軍のかすかな面影を考えると、ロシアの翼はかなり弱体化し、欧米の防衛計画立案者に正当で深刻な躊躇を与えた昔の巨大なソ連空軍とはまったく似ても似つかないものとなった⁶。同様の理由で、広く尊敬を集めるイスラエル空軍も、半世紀の歴史を通じた紛れ

² Colin S. Gray, *Explorations in Strategy*, Westport, Connecticut, Praeger Publishers, 1996, p. 83.

³ John A. Warden, III, "Employing Air Power in the Twenty-First Century," in Richard H. Shultz, Jr., and Robert L. Pfaltzgraff, Jr., eds., *The Future of Air Power in the Aftermath of the Gulf War*, Maxwell AFB, Alabama, Air University Press, July 1992, p. 61.

⁴ Gray, *Explorations In Strategy*, pp. 87, 101, 103.

⁵ Yelena AgapovaによるColonel General Pyotr S. Deinekinへのインタビュー。"A Russia Without Wings Is Not Russia: It Does and Will Have Them," *Krasnaia zvezda*, August 15, 1992を参照。

⁶ さらに詳しい論考は、Benjamin S. Lambeth, *Russia's Air Power in Crisis*, Washington, D.C., Smithsonian

もない技術的洞察力、作戦能力、過去の軍事的勝利にもかかわらず、戦術中心の局地的な空軍でしかない。

これらの事実は、英国空軍退役中将トニー・メイソンが数年前に指摘した全体規模、技術能力、影響力と持続力の限界、作戦・支援任務の領域などの点に関する、米国と他のすべての国の航空力に対する姿勢の格差の拡大を反映している⁷。現在、世界各国の空軍の中でも陸上・海上攻撃、大陸間爆撃機、及び給油機、空輸機、偵察衛星、目標捕捉装置などを保有しているのは米国だけで、それらが全世界で戦力を展開し、全天候下の精密攻撃を可能にする能力を米国に提供している。このことは、米国の主要な同盟国の空軍の特徴である装備・要員面における長所を中傷するものではない。このことは、米国のエア・パワーの特異性とエア・パワーの贈り物の範囲についての事実を単に認めることである。それ故に、長期的な世界の不測事態対応策の計画において、米国の指導部の「空母はどこにいるのか」という最初の質問は偶然ではない。同様に、「砂漠の嵐作戦」以来、主要な戦闘行動の前に行われる最初の質問が「エア・パワーは何ができるのか」ということであることは、もはや驚くに当たらない。侵入そして占領後の回避できない安定化と統合を図るため、同盟国の多数の「地上部隊」を危険な状況に置かざるを得なかった 2003 年のイラクの状況を除き、部隊を危険な状況に置くことが最後の手段になったように、米国のエア・パワーは、「砂漠の嵐作戦」以降のエア・パワーの蓄積された能力故に、米軍が最初のよりどころとする戦力となった。

本稿は、米国がどのようにして事実上の「エア・パワー国家」に成長したか、そして、どのようにこの独自の地位が、第二次世界大戦以降に発展した米軍の能力と遂行に反映されてきたかを広範に検討することを目的とする。本稿は、冷戦の初期からベトナムにおける衝撃的な経験を通じて、米国のエア・パワーが抱えた問題の簡潔な検討から始める。そして、この戦争で初めて明白な効果で模範を示した米国のエア・パワーの質的变化を遂げた核心にスポットライトを当てる目的で「砂漠の嵐作戦」を再検討する。その後、1990年代のバルカン半島での緊急事態対応及び 21 世紀の最初の 3 年間（この期間の後半では、米国の海上航空戦力の劇的な能力改良が生じた）を含むその後のアフガニスタンとイラクでの戦争で証明された米国の空中兵器のその後の改良をたどる。そして最後に、変革を遂げた米国のエア・パワーの性質とそのエア・パワーがどのように近年の米国流の戦争に独特な影響を与えたかを検討していく。

Institution Press, 1999 を参照。

⁷ この現実とそのインプリケーションに関する詳述は、The Era of Differential Air Power” in Air Vice Marshal Tony Mason, RAF (Ret.), *Air Power: A Centennial Appraisal*, London, Brassey’s, 1994, pp. 234-278 を参照。

形成期からベトナムまで

米国のエア・パワーの有名な最初の提唱者である米国陸軍准将ウィリアム・ビリー・ミッチェルは早くも 1925 年に、米国人の特徴を「飛行機で移動する国民」と表現したが、米国の航空宇宙部隊が、その作戦能力で米国を真の「エア・パワー国家」として呼べるほど発展したのはベトナム戦争からペルシャ湾岸戦争に至る比較的最近の 20 年間である⁸。米国空軍とその前身は、航空戦の半世紀の大半を通じ世界の他の空軍と同様に、都市・産業基盤の目標を弱体化させる戦力を中心とする力ずくの戦略であった。このような戦略は、現在の「戦略」兵器、少なくとも非核兵器が、意図する結果を保証する唯一の運用選択肢だったからである。冷戦期間の大半を通じて、米軍の概念における「戦略」エア・パワーは、主に長距離爆撃機と核兵器に結びつく傾向があり、これらの兵器は、その言語に絶する破壊力のため、敵国ソ連によるその使用を阻止することを唯一の存在理由とする装備として扱われた。「戦略」エア・パワー以外のものは、「戦術」、あるいは「戦域」エア・パワーと見なされ、その唯一の目的は統合陸上戦において米地上軍を支援することであった。しかし、米国の防衛計画では、作戦や戦争の経過と結果を左右する可能性のある「通常」エア・パワーの潜在的能力に対してはなんらの配慮もされなかった。やがて、「戦略」エア・パワーは核の問題として考えられ、その他の戦闘航空部隊は、歩兵と機甲部隊が米国の非核戦力の最先端を構成する戦闘への統合アプローチでの脇役へと格下げされた。

この概念と装備の欠乏は、ベトナム戦争の大半を通じた米国のエア・パワーの期待外れの結果に明白に現れた。対北ベトナム戦争末期の 1972 年の 2 回の「ラインバックカー作戦」では、レーザー誘導爆弾 (LGB) が空軍の効果を確保する目的で初めて通常的に使用されたが、ベトナムにおける米国のエア・パワーの早期の出現は、それ以前の 10 年間の後半の「戦域」エア・パワー開発に大きな影響を与えた優勢な冷戦的戦略指向を反映していた。戦域航空部隊は唯一の主要任務が核である戦略空軍 (SAC) と競り合っていると一般的に言われるほど、戦略核任務は重視され、通常兵器の訓練は軽視された。この結果、米国空軍の F-105 戦闘機 (対北ベトナムとの航空戦の主力機) は、最初から核爆撃機となることを目的として設計された。この戦闘機はいくつかの通常装備を搭載していたが、戦術空軍 (TAC) にとり SAC が支配的な空軍にこの航空機を調達させる唯一の方法は、その航空機に核運搬能力と任務を与えることであった。その結果、二重操縦系統の油圧パイプは並行して配置され、1 回で両系統を同時に取り外すだけで、航空機は制御不能となった。この理由と航空機が要求された任務の遂行に関係する数多く

⁸ William Mitchell, *Winged Defense: The Development and Possibilities of Modern Air Power—Economic and Military*, New York, Dover Publications, 1988, first published in 1925, p. 6.

の設計不具合により、合計で 833 機生産された F-105 の内、383 機が北ベトナムとの戦闘で失われた。

ベトナム戦争の最後の最後まで解決されなかった通常地上攻撃作戦に関するもう 1 つの問題は、エア・パワーが夜間では信頼できるほど効果を発揮できなかったことである。夜間能力システムの開発と運用における着実な進展にもかかわらず、実際に夜を支配していたのは米軍部隊ではなく北ベトナムとベトコンであった。さらに、その当時の優勢な米軍のエア・パワーは、北ベトナムで最高の条件下でも有意義な形で目標と交戦することが不可能であった。北ベトナムの地对空ミサイル (SAM)、高射砲 (AAA)、及びソ連が供給したミグ戦闘機は、危険な高度でも機能を果たしていた。南での戦争では、北ベトナムの米軍司令官に与えられた限定的な情報・監視・偵察 (ISR) 能力は、米国のエア・パワーにとり重要な目標を提供できなかった。

1972 年に北ベトナムで投入された米国の航空部隊は、その能力面で 1965 年から 1968 年にかけて投入された部隊よりもかなり高度であったことは事実である。それらの性能の改良点の中でも特に顕著なのはレーザー誘導爆弾で、橋梁やその他の標的に対する運用ではレーザー誘導爆弾の将来の可能性を示す予告編であった。しかし、2 回目の「ラインバッカー作戦」で最終的に北ベトナムの防空手段を徹底的に撃破するまで、敵の SAM と AAA は米国のエア・パワーに相当な脅威を与えた。夜間及び全天候作戦はこの戦争を通じて極めて困難で、北端のルートパッケージの堅固に防衛された目標を攻撃する犠牲は、エア・パワーの徹底的な投入を妨げるほど大きかった。

しかし、1972 年から 10 年以上の間に生じた米国の「通常」エア・パワー全体の本格的な復活は、米国が最終的にベトナムでの長期にわたる関与から解放されて、すべてを大きく変化させた⁹。ベトナム戦争以降に達成された米国のエア・パワーの主要な進歩の中で最も顕著なものは、搭乗員の熟練、装備能力、そして作戦構想の 3 つの分野である。これらの 3 つの分野の進歩は、新型や改良されたプラットフォーム、兵器、及びその他のハードウェアによる訓練と戦術の大幅な強化から、より効果的な運用技術及び統合軍戦略まで及んだ。これらの進展がもたらした結果として生じた米国のエア・パワーの変革は、「砂漠の嵐作戦」での多国籍軍の空爆作戦による予想もしなかった劇的な成功により、その有効性が完全に証明された。このような重複し、相互に補強し合う進展の結果、米国のような本格的なエア・パワー国家は、第二次世界大戦を通じて米国が行っていた空中投下型戦力の行使を検討する必要がなくなった。現在では、より多くの選択肢があり、敵の抵抗能力に直接的な影響を与える（最初に配備された敵部隊を直接攻撃する）

⁹ この歴史の概要は、Benjamin S. Lambeth, “The Air Force Renaissance,” in General James P. McCarthy, USAF (Ret.), ed., *The Air Force*, Andrews AFB, Maryland, Hugh Lauter Levin Associates, Inc., for the Air Force Historical Foundation, 2002, pp. 190-217.

ためには、敵の戦闘空間の全域での空中投下型兵器で十分である。この復活の結果、典型的なエア・パワーの思考で勢力を振るい、かつ純粹に懲罰を目的とした第二次世界大戦のヨーロッパと太平洋戦域での連合国の爆撃を支えたような戦略の種類は、罪に対する報復を求め、敵の経済・社会復興を遅らせることを望まない限り、現在の米国にとっては時代遅れとなった。

「砂漠の嵐作戦」の試練

米国のエア・パワーは、「砂漠の嵐作戦」の開始後の数日でその信頼性を大きく高めた。多国籍軍による成功裏の空爆作戦で証明された高度先端技術、集中訓練、確固たる戦略の統合は、第二次世界大戦における前途有望なスタート、そして1965年から1968年にかけての北ベトナムに対する「ローリング・サンダー空爆作戦」での3年以上にわたる誤用以来、米国の空中兵器の戦略的実効性の躍進を反映した。イラクでの迅速な制空権の確保、及びこの成功により、米国の航空宇宙戦力が、多国籍軍の地上での目的の早期達成に貢献することで成し遂げたものは、エア・パワー時代の到来であった。実際に、当時の米国空軍参謀総長メリル・マクピーク将軍は彼の個人的意見として、「野戦軍がエア・パワーに敗北したのは砂漠の嵐作戦が歴史上初めてだ」とまで述べた¹⁰。

この個人的意見に対して何と言おうとも、米国のエア・パワーがすべての軍種で（米国空軍に限らず）過去20年間、戦闘機能の高いレベルでの統合作戦の結果に貢献する能力において、非線形の成長を達成したことは疑いない。この成長は、指揮・統制・通信・コンピュータ・情報・監視・偵察の近年の発展により可能となった敵のセンサーに対する低可観測性（より一般的に「ステルス」として知られている）、固定目標を常に比較的 안전한発射最適距離からより正確に攻撃する能力、及び戦闘空間認識の拡大（「情報優位性」とも呼ばれる）の統合により可能となった。それらの発展の結果、米国のエア・パワーは、統合作戦における勝利の条件を決定するというエア・パワーの開発者の長期的な約束を守る上で必要な多くの能力を最終的に獲得できた。多国籍軍がイラク陸軍をわずか6週間で、しかも少数の友軍の犠牲（50万人以上の兵士が配備された中で、米国人の戦死者はわずか148名）で撃破したことは、戦力の行使における新境地を意味した。

SAMとAAAによる敵防空網の制圧（SEAD）及びイラク空軍の早期の無力化は、「砂漠の嵐作戦」における多国籍軍のエア・パワーの最も高く評価された戦果であった。しかし、それらの戦果はそれ自体見事であるが、戦争の究極の結果を決定するエア・パワーが演じた中心的役割を説明するものではなかった。それどころか、それらの戦果は、

¹⁰ General Merrill A. McPeak, USAF (Ret.), *Selected Works 1990-1944*, Maxwell AFB, Alabama, Air University Press, August 1995, p. 47.

米国のエア・パワーがその最も注目すべき真の力、すなわち精密攻撃による敵陸軍と被害を受けることなく大規模な交戦力を行使するのに必要な「責任」条件である。この点に関する正しい認識は、エア・パワーそれ自体が「砂漠の嵐作戦」で初めて証明したように、エア・パワーが適切に管理されている限り、その成し遂げる能力を正確に理解するために重要である。戦闘の開始を熟知している強力な敵に対して航空優勢を短時間に確保し、多国籍軍地上部隊がクウェート作戦区域での僅か 100 時間の一掃作戦で無血の勝利を獲得する地点まで敵部隊を招き寄せる米国航空兵器の能力は、「砂漠の嵐作戦」での空爆作戦をエア・パワーの成功物語のリストに堂々と載せることを保証する戦果である。このことは、成熟した米国の航空戦に対する姿勢の構築を目的とするベトナム戦争以来のすべての試みを裏付けただけではなく、多国籍軍の死傷者を極端に低く抑える成功は、近代戦争における空中運搬兵器と陸・海上運搬兵器との関係に対する基本的に新しいアプローチを考える時が来たことを示唆している。

当然のことながら、「砂漠の嵐作戦」における多国籍軍の空爆作戦が演じた中心的役割とエア・パワーの戦果の結果としてのその能力に関する広範な主張を考えると、米国の役割と資源に関する議論はますますエア・パワーに焦点を合わせた論争へ向かっている。今日の米国の防衛計画の中心的課題は、敵軍に関する情報を取得、処理、送信し、敵軍を精密な空中投下兵器で攻撃する近年と近い将来における米国の能力増強のもつインプリケーションであり、この論争は米国が、戦域闘争目的を遂行し、米国の死傷者を最小限に抑えるために、地上部隊に代わる正確な空中長距離攻撃兵器に対する米国の信頼度に関わるようになってきた。

湾岸戦争を通じてのイラク地上部隊に対し何度も繰り返行使されたエア・パワーの明白な戦果で示されるリアルタイムの偵察と精密攻撃能力の統合は、統合作戦における空中運搬兵器と陸上・海上運搬兵器の新しい関係の到来を告げた。この変換の 1 つの概念は、その結果もたらされる相乗効果が、より一般的な消耗による削減ではなく、機能的な効果により、敵軍の敗北を促すために何をするかに関係する。丁度、初期の SEAD 作戦がイラクのレーダー誘導 SAM を物理的に破壊するのではなく、SAM のオペレータがレーダーを作動させないように威嚇することで無力化に成功したように、E-8 総合査察目標攻撃レーダー・システム (JSTARS) とその他のセンサー・プラットフォームによる 1,000 輦以上の戦車に対するその後の夜間精密攻撃の成功は、潜在的に敵対的な軍隊に夜間聖域や隠れ場所が無いことを知らしめた。また同時に、昼間あるいは夜間の行動は、迅速、かつ致命的な攻撃に繋がることを示した。このことは、敵の砲火の範囲内の地上軍を精密爆撃に置き換えて友軍の死傷者を出さないエア・パワーの新しい役割の前兆となった。

航空戦装備の面におけるイラクに対する多国籍軍の明らかな技術的優位性は、この戦

争の経過と結果を決定するのに重要な影響を与え、多国籍軍のいくつかの「魔法の解決策」は、その数に比べ遥かに一方的な影響を与え、「砂漠の嵐作戦」での比較的楽な戦果をもたらした。それらには、各種のプラットフォーム、兵器及びシステムの中でも、F-117 ステルス攻撃機、F-4G に搭載される AGM-88 高速抗放射線ミサイル (HARM) と APR-47 敵レーダー脅威センサー、レーザー誘導爆弾、JSTARS などが含まれていた。もしこれらの装備が無かったら、この戦争における多国籍軍の犠牲はより大きかったであろう。「砂漠の嵐作戦」の比較的早期の成功が証明するように、この戦争の前の 10 年間は、米国の空中兵器の実効性と致死性の広範囲にわたる改善があった。それらの改善の多くは漸進的であったが、いくつかは性能において真に画期的で、イラクに対する多国籍軍の一見容易な勝利の原因である。

しかし高度先端技術は、「砂漠の嵐作戦」における多国籍軍の成功にとって重要な決定要因であったが、それだけが決定要因ではなかった。優れた訓練、モチベーション、熟練度、リーダーシップ、戦術の手際よさ、実行の際の大胆さも最終結果を出す上で同様に重要であった。「砂漠の嵐作戦」の最終結果を左右した戦力多重増加力は、何よりも統合軍の立案者が考えた多国籍軍の多種多様な戦力を相乗効果が出るように 1 つに統合した方法であった。エア・パワーの慎重な提唱者は、1991 年の湾岸戦争における勝利はエア・パワー単独の力でもたらされたとは決して言わなかった。むしろ、それらの提唱者はその意見に近いが 1 つの重要な違いがある意見を述べている。エア・パワーは他のすべての戦力要素にとり戦争の最終段階を容易にする勝利の条件を作り出した。

「砂漠の嵐作戦」に続く冷戦後の初期段階、米国の航空戦力の大幅な兵員削減の大部分は、戦力体制をかつてないほど優れたものにした広範な質的向上により補われた。1 つの理由には、米国の軍用機のほぼすべてに、精密誘導兵器を投下する機能が装備されていたことである。もう 1 つの理由は、湾岸戦争で F-117 により最初に有意義な形で立証されたように、ステルスの出現は、1993 年に導入された空軍の第二次世代の B-2 ステルス爆撃機のその後の展開により、さらに進歩を遂げた。現在のステルス技術は、脅威に関する正確な最新の情報に基づく優れた戦術と結び付き、既存の早期警戒・交戦レーダー及びそれらに依存する兵器を無用なものにした。その他に、「砂漠の嵐作戦」以降に軍に導入された新型兵器は、陸上攻撃及び空対空の任務で米国のエア・パワーの致死率を高め、空軍の爆撃機構成は核から通常兵器主体への戦争手段の変遷を成し遂げた。それらの 2 つの作戦の特性が提供した能力により、統合軍司令官は、その目標が配備された部隊であろうが施設であろうが、敵戦力の中核システムに敵の反撃を受けることなく精密攻撃を遂行でき、米国のエア・パワーの新しい優位性を伝えた。そしていつの間にか、それらは統合作戦の顔を根本的に変えてしまったのである。

同盟国の力作戦

唯一独自の「エア・パワー国家」としての米国の出現についてのさらなる証拠は、NATO軍が展開し、米国が主導した旧ユーゴスラビアに対する1999年の3月24日から6月7日までの空爆作戦であった。この作戦の目的は、セルビアのコソボ地区市民に対するセルビア人指導者のスロボダン・ミロシェビッチによる人権侵害を中止することであった¹¹。後で分かったことだが、「同盟国の力」と呼ばれた78日間にわたる作戦は、エア・パワーが地域紛争の結果を決定するのに極めて重要であることを証明したケースとして、1990年代の湾岸戦争とその後の「デリベレート・フォース作戦」（1995年にNATOが展開し米国が主導したボスニアのセルビア人勢力による同様な人権侵害の挑発に対する2週間のウォームアップ作戦）に引き続き3度目となった。

「同盟国の力作戦」は現在配備されている3機種の重爆撃機（B-52、B-1B、及びB-2）が同時に運用された初めての空爆作戦でもあった。この中でも特に重要なのは、作戦の最初の夜、ミズーリ州のホワイトマン空軍基地から無着陸で目標まで飛行した空軍のB-2ステルス爆撃機の待ち望んだ戦闘での初舞台となったことである。多くの者が驚かされたのは、B-2がこの空爆作戦全体を通じて最も安定し、有効的な実行者となったことである。B-2の任務はたった50回で、連合軍側の総戦闘出撃回数の1%にも満たなかった。しかし、B-2はこの作戦を通じて費やされたすべての精密爆弾の3分の1を投下した。通常、極めて正確な爆弾16発を搭載し、1回の飛行で16の異なる目標地点に投下できるGBU-31 2,000ポンド衛星誘導爆弾（JDAM）の初の実践運用により、B-2爆撃機は、友軍の軍用機が出撃できない天候でも作戦を展開できる能力を証明したのである¹²。無人機（UAV）も連合軍の戦闘支援にこれまでの作戦以上に運用され、とりわけ移動SAM、セルビア軍の兵団地、及び野外に駐機された敵機などの探索に従事した。

連合軍の作戦遂行には、主にこの作戦の多国籍的性質により引き起こされる深刻な内部摩擦や非能率が決して無かったわけではないが、エア・パワーの行使が、友軍の陸上戦闘なしで敵の指導者の降伏を強要した最初の事例となった。この点に関して、この作戦の遂行と結果は、オーストラリアのエア・パワーの歴史家であるアラン・スティーブンスによる「近代戦争は、土地を占拠し保有するよりも、最終的な政治的結末により関心がある」という事後の考察をよく裏付けている¹³。この作戦の成功裏の結果は多くの不満にもかかわらず、米国のエア・パワーが連合軍特有の非能率に関係なく、作戦を漸

¹¹ この作戦の詳細な内容については、Benjamin S. Lambeth, *NATO's Air War for Kosovo: A Strategic and Operational Assessment*, Santa Monica, California, RAND Corporation, MR-1365-AF, 2001を参照。

¹² Paul Richter, "B-2 Drops Its Bad PR in Air War," *Los Angeles Times*, July 8, 1999.

¹³ Alan Stephens, *Kosovo, or the Future of War*, Paper Number 77, Air Power Studies Center, RAAF Fairbairn, Australia, August 1999, p. 21.

増的にエスカレートする戦略を引き受けるに十分な能力を保有するようになったことをさらに証明している。連合軍の漸増主義をもっと前のベトナムでの戦争での漸増主義よりも、受け入れやすくしたものは、ステルス技術、長距離精密攻撃、及び電子戦争によって優勢な連合軍がミロセビッチと一方的な戦争を行ったことであり、最も理想的な形ではないとしても、望んだ結果を得ることが可能であったことである¹⁴。このことは、米国のエア・パワーが現在ほど発達していなかった当時、選択肢ではなかった。

最後に米国は、予期せぬ損害による非戦闘員の死傷者という点において、十分準備されていない戦場においても、おどろくべき低いコストによって、エア・パワーによる強制力を行使できることを示したのである。この作戦の経験は、8年前の湾岸戦争と同様に、友軍の地上部隊は早い時期に容赦なく戦う必要はないことを示していたが、信頼のおける地上部隊が作戦戦略（連合軍にはこれが不足していた）に含まれていないと、エア・パワーが多くの場合、その全潜在能力を発揮できないことが再確認された。

後から考察すると、コソボにおけるNATO軍の航空戦でおそらく最も注目すべきことは、ミロセビッチに楽々と勝ったことではなく、連合軍の指導者がリスクを冒そうともせず、下らないことでまともまっているにもかかわらず、エア・パワーが勝利したことである。1991年の湾岸戦争は、エア・パワーの限界を理解し、エア・パワーが妥協することなく明確で実現可能な計画の達成を目指して使用されると、エア・パワーが決定的であることを最終的に証明した。「砂漠の嵐作戦」における米国の介入の目標は結局のところ、サダム・フセインを懲らしめることでもイラクを政治的存在に変化させることでもなく、イラク軍のクウェートからの撤退を余儀なくさせ、それ以前の外交活動や経済制裁でも無駄だったイラク軍に可能な範囲内で打ち勝つことであった。この目標は最初から最後まで明確であった。しかし、連合軍では、米国とNATOが最終的に「デリベレート・フォース作戦」を実行する決意を固める前のボスニア紛争のときと同様に、連合軍の多くの指導者がこの基本的なルールを忘れてしまったと言えるような状態にあった。しかし、米国空軍マクピーク退役将軍はこの作戦の成功の後に、「あらゆる選択肢をもっていたほうがもっと賢明だったと思う。陸上での戦闘を回避したいわれわれの計画をユーゴスラビアに合図していたら、軍事・外交的手段としてのエア・パワーの限界を試すこの爆撃が成功する確率はもっと低かっただろう」と語った¹⁵。

¹⁴ Colonel Phillip S. Meilinger, USAF, "Gradual Escalation: NATO's Kosovo Air Campaign, Though Decried as a Strategy, May be the Future of War," *Armed Forces Journal International*, October 1999, p. 18.

¹⁵ General Merrill A. McPeak, USAF (Ret.), "The Kosovo Result: The Facts Speak for Themselves," *Armed Forces Journal International*, September 1999, p. 64 を参照。

不朽の自由作戦

2001年9月11日のイスラム過激派による米国への攻撃は、米国を一晩で通告なき対テロ戦争に陥れ、この戦いは今も続いている。「不朽の自由作戦」と呼ばれるこの戦争の第一段階は、21世紀最初の大規模な戦争となった。この戦いは主に、アフガニスタンのテロリストの重要拠点とその組織に安全な場所を提供するタリバン原理主義政権に対する、米国と同盟国の特殊作戦部隊（SOF）による航空戦とアフガニスタン先住民の抵抗組織による陸上戦で行われた。すでに考察した「同盟の力作戦」以上に、この戦いでは湾岸戦争以降も高度化された米国の航空力が革新的で前例のない方法で使用された¹⁶。

基本的には、「不朽の自由作戦」はSOFを中心とする統合エア・パワーにより、米国にとっての新しい戦闘法となった。数ある中でも、この作戦は、目標地点から数千マイル離れた陸上基地と海軍航空戦の歴史上初の陸封の作戦地域からより遠い位置にある海軍空母の作戦基地から、航空力を成功裏に投入する米国の能力を示した。この作戦を可能にした3つの重要な要素は、遠く離れたサウジアラビアに位置する前例のないほどに高度化され、機能的航空作戦センターに制御された長距離精密エア・パワー、常に適切なリアルタイム戦術情報、及び陸上の移動SOFチームがアフガニスタン先住民の抵抗戦士と緊密に連携、位置状況を把握し、独自に作戦を展開して、敵の待ち伏せを回避するために十分な通常火器と電子機器で装備されていたことである。

「不朽の自由作戦」で達成した航空戦での「最初のもの」に関しては、RQ-4 グローバルホーク高高度無人機の初の戦闘投入とヘルファイアミサイルを搭載したMQ-1 プレデター無人機及びB-1BとB-52 爆撃機による衛星誘導爆弾GBU-31 (JDAM) の初の実戦投入である（「同盟の力作戦」では、B-2 爆撃機のみがこの衛星誘導爆弾を投下できた）。アフガニスタンでの航空戦ではさらに、10年前の湾岸戦争で初めて見られた重要な傾向が依然として引き継がれているものもあった。湾岸戦争で投入された精密空中投下爆弾はこの戦争で使用された弾薬の9%だけであったが、連合軍（コソボ紛争）で29%、「不朽の自由作戦」では60%となった¹⁷。精密誘導兵器とこれらの兵器の運搬が可能な軍用機の入手が容易になった結果、作戦出撃1回当たりのPGMの数量は、過去10年間着実に増加してきた。戦力全体の劇的な増強により、われわれは、特定の目標を攻撃するのに必要な出撃回数ではなく、1回の出撃でいくつの目標を成功裏に攻撃できたかで語る

¹⁶ 以下に述べるのは要点で、Benjamin S. Lambeth, *Air Power Against Terror: America's Conduct of Operation Enduring Freedom*, Santa Monica, California, RAND Corporation, MG-166-CENTAF, 2005 では、さらに詳しく論じられている。

¹⁷ Christopher J. Bowie, Robert P. Haffa, Jr., and Robert E. Mullins, *Future War: What Trends in America's Post-Cold War Military Conflicts Tell US About Early 21st Century Warfare*, Arlington, Va.: Northrop Grumman Analysis Center, January 2003, p. 60.

ことができるようになった。同様に、湾岸戦争以降の一連の米国の戦闘で、長距離爆撃機が投下した弾薬数の割合は着実に増加している。湾岸戦争では32%だったが、コソボ紛争では約50%、そして「不朽の自由作戦」では約70%へと増加した¹⁸。

「不朽の自由作戦」は近代戦争の歴史上初めて、敵の行動を探り容赦なく睨みを利かす空中・宇宙配備の情報・監視・偵察（ISR）の傘の下で行われた。この相互接続・相互支援型センサーの多様性により、以前の紛争で入手できたものよりISR入力的大幅な改良が可能となった。それはまた、ISRの統合は、「不朽の自由作戦」をそれまでの全ての航空戦から区別した。「不朽の自由作戦」で開発されたもう1つの注目すべき新機軸は、エア・パワーと地上戦力の緊密な同時提携であった。SOFチームは反タリバン北部同盟の未組織部隊に方向を指示し、米国の搭乗員に精密爆弾攻撃を行うための正確かつ有効な標的情報を提供した。航空戦が終了する頃には、連合軍搭乗員が攻撃した目標の80%は事前に計画されたものではなく、彼らの航空機が指定されたアフガニスタン上空の待機点へ向かう途中に指示されたものである。地上の空軍攻撃指揮と陸海軍特殊部隊の連携は、恐らくこの戦争における最も偉大な戦術革新である。

テロに対する世界戦争における最初の軍事行動としてのその主要な役割に加え、「不朽の自由作戦」は同時に、過去20年間に登場した最重要のエア・パワーのいくつかの新製品を実戦の下で試験する戦場研究所であった。その中には、精密攻撃兵器としての無人ISRプラットフォーム（MQ-1 プレデター）の初の投入があった。これはまた、米国中央情報局を主とする「他の政府機関」が、空中戦闘作戦に直接統合された最初のケースでもあった。この主要な特徴は、新技術によるデータ統合の改良、航空作戦センターの管理能力向上、宇宙空間からの支援の増加、より優れた作戦構想などの結果による敵に対する粘り強い圧力と実行の迅速性などが含まれる。粘り強い圧力の多くは精密兵器の広範な普及と、それらの兵器を運搬する米国の攻撃プラットフォームに由来する。

この統合の成功要因は、運用した技術というよりも、それらの技術を統合して作戦構想を練り上げた方法にあった。実効性に焦点を置いた作戦計画は、正確でリアルタイムな目標情報に大きく頼っていた。この際に大きな進展が見られたのは航空機や兵器ではなく、E-8 プレデターとその他の空中・宇宙配備型センサーのデータを24時間体制でリンクするISRの統合にあった。この結果は「同盟の力作戦」の2年間で得られたものより遥かに優れていた。通信の接続性向上と使用できる帯域幅の増加により、敵の行動の常時監視を可能にし、センサーから射手へのデータサイクル時間（口語的には「キル・チェーン」と呼ばれる）を大幅に短縮することができた。さらに、敵地上部隊に対する攻勢的航空運用の新構想の実験は、「不朽の自由作戦」で成功した。この構想は、近接航

¹⁸ *Ibid.*, p. 4.

空支援（CAS）としばしば混同されているが、友軍と接していない敵部隊に対する直接の空中攻撃が伴うという点で、根本的に新しいものであった¹⁹。

最終的に、前代未聞の暴虐に直面しての「不朽の自由作戦」では、米国は圧倒的に優勢な軍事力を示し、その航空作戦の大半で優勢であった。遠いインド洋のディエゴ・ガルシア島英軍基地からアフガニスタンまでの爆撃機の平均的な任務は12時間から15時間を要した。米国海軍と海兵隊の典型的な艦載攻撃戦闘機は、北アラビア海からの任務に4時間から6時間を要し、一部は10時間もかかった。ペルシャ湾からの陸上戦闘機の出撃には通常10時間かそれ以上を必要とした。この作戦はエア・パワー、連合軍の特殊作戦部隊（SOF）、そして陸上のアフガニスタン抵抗勢力の戦闘員とのユニークな組み合わせだけでなく、さらに米国の重機動作戦部隊の不在も目立った。それらの代わりに、SOF小部隊は米国のエア・パワーが相互に支援する能力に基づく独自の相乗効果をもたらした。SOFの支援により、エア・パワーはSOFの支援がない場合と比べ、より高い実効性を発揮でき、抵抗勢力がアフガニスタンのタリバン勢力と外国テロ部隊（組織）との地上戦を展開する中、エア・パワーは、その支援がなければ不可能と思われるSOFチームの成功に貢献した。この結果、タリバン部隊の位置への正確な空中攻撃により、連合軍SOFチームはアフガニスタン抵抗勢力の指導者に対して、エア・パワーは即効性があり、米国のターミナル攻撃コントローラーはこれを可能にする決定要因であることを説き伏せることができた。連合軍の地上監視は、敵の戦闘員を識別・特定し、北部同盟部隊が敵の戦闘員を隠れ場所から追い出し、直接攻撃の目標にした後、彼らを識別・特定して米国のエア・パワーの実効性をより高めた。連合軍はさらに意図しない付随的損害だけでなく、友軍に対する誤射も低減させた。米国側に関しては、爆撃機と戦闘機の搭乗員が付随的損害を回避する最も厳しい規則を守り、賞賛に値する規律を示した。陸上のSOFはさらに、潜在的な敵の目標を監視する根気のいる待機を可能にし、正確な地理位置と目標情報を取得し、攻撃に最適な時間まで粘り、そして敵が最も攻撃されやすい状況にあるときのみ攻撃の合図を送った。この中で、SOFの存在が「不朽の自由作戦」の結果にとって極めて重要であった。

もし、「不朽の自由作戦」において、「トランスフォーメーション」の兆候があったとすれば、それは作戦を成功に導いた、武器、弾薬とその運搬全般をカバーする、情報の統合化による優位である。この新しい原動力は、精密攻撃エア・パワー、目標位置誤認の最小化、付随的被害の回避、及び後方からの命令におけるSOFとの統合も含め、こ

¹⁹ 陸上戦におけるエア・パワーの運用へのこの新しいアプローチに関する詳述は、Major General David A. Deptula, USAF, Colonel Gary Crowder, USAF, and Major George L. Stamper, USAF, “Direct Attack: Enhancing Counterland Doctrine and Joint Air-Ground Operations, *Air and Space Power Journal*, Winter 2003, pp. 5-12 を参照。

の戦争の他のすべての重要な側面を可能にした。エア・パワーを行使する際に、人間による ISR センサーとして SOF チームを活用したことは、その方法と目的において近接航空支援の伝統的な概念と大きく異なり、まったく新しい概念であった。リアルタイム画像と通信接続性の向上などにより、「キル・チェーン」(訳注: 発見・固定・追跡・照準・交戦・査定の 6 段階からなる米国空軍の目標サイクル) は、以前より短くなり、目標攻撃の正確さは驚異的である。「不朽の自由作戦」を通じて、米国は執拗な ISR (情報、監視、偵察) と精密空中攻撃により、敵に聖域を与えることを拒否する能力が備わった。このようなネットワーク中心の作戦は、現在進行している米国の戦闘形態におけるパラダイム・シフトの最先端であり、20 世紀初頭の戦車の登場に比べても、潜在的により重要な時期である。

米国の空母航空戦力の向上

21 世紀の幕開けは、米国の航空母艦を基地とする航空隊にとって新時代の到来である。10 年前の 1990 年 8 月のイラクによるクウェート侵攻は、米国の空母エア・パワーにとり、冷戦後初の危機だけではなく、経験したことのない新時代の要求に直面していた海軍にとり、警鐘となる一連の挑戦であった。「砂漠の嵐作戦」は、米国海軍がその前の 20 年間にソ連を想定して計画し、準備をした相対峙するハイテク装備の部隊が外洋で展開する戦闘とはまったく異なっていた。この戦争は、沿岸作戦に特有の挑戦に満ちていた。海軍はそれらの挑戦に直面して、1991 年の湾岸戦争の初期に始まった冷戦後時代に必要な再整備を目指して後方へ急いで退いた。1991 年の湾岸戦争の経験から判明した欠点に応じて、海軍はその後、精密攻撃力を高め、新しいシステムを配備し、現有のプラットフォームに改善を行うことにより、湾岸戦争を通じて空母航空隊が不足していた柔軟性を備えた。

しかし、2001 年 9 月 11 日の米国に対するテロ攻撃は、空母航空隊の慣れ親しんだ展開方法におけるもう 1 つの重大な変化の兆しとなった。テロ攻撃は、米国に対し、前方航空作戦基地へのアクセスをほとんど持たない南西アジアの遠隔地への深攻作戦能力の必要性を突きつけた。この必要性は、同時に米国の空母部隊に新しいユニークな挑戦を突きつけた。前節で短く言及した「不朽の自由作戦」では、北アラビア海から作戦を行う空母を基地とする海軍と海兵隊の攻撃戦闘機が、陸上戦闘機の大規模投入を遂行するために交戦地帯に十分近い適当な作戦基地がないという理由で、空軍の大部分の陸上戦闘機の代わりを果たした。結果、この地域で展開した空母航空団は、この戦争を通じて行われた攻撃戦闘機の出撃のほとんどを担った。

約 1 年後、海軍空母部隊は、2003 年 3 月 19 日に始まった「イラク解放作戦」に備え

るため、5 個戦闘群と戦闘航空団を基地（ペルシャ湾の 3 基地と地中海東部の 2 基地）へ配備し、再び重要な役割を果たすことになった。大規模な戦闘が展開されたこの 3 週間には、5 隻の空母（もう 1 隻は他の 1 隻と交代するため戦闘地域へ向かう途中で、7 隻目は予備として西太平洋に残り、8 隻目はすでに配備済みで出動できる状態）がイラクのサダム・フセインの部隊に対する作戦を展開した。米英空軍の長距離給油機による空中給油の支援により、地中海東部の 2 隻の空母からの戦闘機は、時には 10 時間にもわたる深攻任務を繰り返し行った。

相次いだ艦載機による 2 回の空爆作戦は、米国空軍の戦力が沿岸域以遠でも持続的運用が可能であることを証明した。このようなことは、これまでの米国の空母エア・パワーの発展で経験したことのないものであった。さらに海軍航空隊が、この 2 回の戦闘であらゆる航空作戦の中核であったサウジアラビアの米国航空司令センターを通じて、これほどまでに代役を完全に務めたのは初めてである。その上、海軍航空隊はこれらの作戦での成功をもたらした統合・連合航空作戦の計画と遂行に完全に統合されていた。

1991 年の湾岸戦争を含むこれまでの海軍航空隊の運用と異なり、21 世紀初頭の 2 回の戦闘は、海軍戦闘機による精密誘導兵器のほぼ専属的な運用が象徴的であった。さらにこの 2 回の作戦は、海軍の空母部隊もデジタルデータと統合され、アナログからデジタルネットワーク中心の作戦への転換が顕著であった。これらの偉業は、米国海軍航空隊の編制が現在とは異なり、多種多様な異なる挑戦への対処を志向していた冷戦の頂点では不可能であったろう。これら 2 回の戦闘における海軍空母の戦闘群と航空団の戦力は、冷戦の終結に続く 10 年以上の後退と迷走の後の米空母エア・パワーの最終的な成熟を明確に証明した。

「不朽の自由作戦」と「イラク解放作戦」は、海軍の空母が、航空団の個別で自立したプラットフォームとしてよりも、航空司令官の与えられた作戦目標を達成する上で必要で、常に効果的な幾多の出撃を行い、持続することが可能な結集した部隊としてのみ、その運用が可能であることを証明した。この功績は、海軍が 1991 年の「砂漠の嵐作戦」で初めて明らかにした作戦、構想、部隊の能力不足の大部分を解消したことによる直接の結果である。1983 年の対レバノン及び 1986 年の対リビアそして 1990 年代の「デリベレート・フォース作戦」と「同盟の力」などその後の緊急事態対応での懲罰的攻撃における比較的短距離の出撃と異なり、これらの任務には 10 時間も必要とし、沿岸地域から遠いアフガニスタンとイラクの中心地までにわたった。特にアフガニスタンは、南西アジアの奥地に位置する陸封国である。それぞれのケースでは、米国空母のエア・パワーは、数百マイル内陸の目標に対し持続的攻撃を加え、作戦上の必要があれば、新編成による給油機と必要な補給の定期的な支援を受けて数週間あるいは数ヶ月にわたる攻撃を続けることができることを証明した。以前は不可能だった空母航空隊による遠隔地

での信頼がおけ、継続した戦闘力の投入は、1990年代を通じて、海上攻撃航空の役割と任務の論争における批判の根強い共通のテーマであった。海上からの攻撃と支援の強みによる2つの戦争への貢献は、広く行き渡った深い疑念を払拭することになった²⁰。

米国は現在、空母を基地とする一定規模の攻撃部隊を展開できる世界で唯一の国である。深攻作戦空母航空隊は、現存する世界唯一の超大国としての米国の地位の自然の付属物であるとともに、米国海軍を独特な形で他の世界の国々の海軍から区別する。ニミッツ級空母は、米国の指導者が要求する場所ならどこへでも行ける4.5エーカーの米国の領土だと言われてきた。この特性は長い間、空母の必要性が急に生じて、一時に1ヶ所にしかいられない単なる宣伝文句として、空母エア・パワーへの批判者により片付けられていた。このような批判は、海軍が常に2個あるいは3個の空母戦闘群を海上に配備し、その他の戦闘群と関連する航空団が米国で各種の整備と再適格性確認の訓練を受けるため急な命令でも展開できない状況であった冷戦時代には有効であったであろう。しかし、米国海軍が過去3年を費やして独自に開発し、「イラク解放作戦」での大成功で立証された空母の能力増強を考えると、この批判はもはや妥当ではない。

空母エア・パワーが世界中の米国戦闘司令官に与える戦力に関しては、多くの評論家は、1991年に中止されたA-12艦載ステルス爆撃機の後を継ぐ中型攻撃機の開発計画がないことに対して、海軍は事実上深攻作戦から撤退するという暗黙の意思表示であると過去何年間も主張してきた。しかし、「不朽の自由作戦」に参加した4個航空団が示した3ヶ月以上にわたる任務効果の高い毎日の出撃と、これら航空団の任務を象徴する目標までの長い距離を考えると、その主張が正当ではないことを示している。今日の米国の空母航空隊の本質は、米空軍と同盟国の給油支援を受けることによって、海上からの持続的深攻にある。それらは、「不朽の自由作戦」時のように近くに陸上基地がない場合の主役として、あるいはイラク解放作戦時のように近くに陸上基地がある場合の統合・合同作戦での必要かつ歓迎される対等の貢献者として存在している。海上からの持続的深攻にある。さらに、F-35C統合攻撃戦闘機がこの10年の終わりにかけて初期の作戦能力を達成すれば、海軍は1996年12月に30年にわたる艦隊任務の後に最後の飛行を行った由緒あるA-6中距離攻撃爆撃機に匹敵するステルス攻撃プラットフォームを保有することになる。

²⁰ さらなる検討は、Benjamin S. Lambeth, *American Carrier Air Power at the Dawn of a New Century*, Santa Monica, California, RAND Corporation, MG-404-NAVY, 2005を参照。

変革を遂げた米国エア・パワーについて

これまでに述べた米国エア・パワーの多様な運用例が証明するように、米国のエア・パワーは過去 20 年間、その潜在効果が完全に戦略的になるまで変革を遂げてきた。しかしこのことは、ステルス性の到来、正確な迎撃能力と情報能力の向上が実現するまで真実ではなかった。これまでの空爆作戦は、あまりにも多くの航空機を必要とし、かつ膨大な損失が伴い、その効果を上げることができず、作戦・戦略面での実効性が限定的であった。これとは対照的に、現在の米国のエア・パワーは、戦闘の開始から敵にその存在を感じさせ、統合作戦の経過と結果に決定的な影響を敵に与えるまでになった²¹。

第一に、つい最近まで必要であった戦力を蓄積する必要性がなくなった。戦闘空間意識の向上、航空機の高い生存率、及び兵器の精密度の向上により、戦力を蓄積しなくても質量効果を達成することが可能となった。これにより現在のエア・パワーは、以前には実現できなかった効果を上げることが可能となった。残る唯一の課題は、昔とは違いこれらの効果を上げることが可能かどうかではなく、いつ達成するかである

もちろん、統合軍の要素は、統合軍司令官の判断で、新技術と作戦構想を最大限利用する方法により、それらの効果を上げる機会が増えてきている。現代の米国エア・パワーの特徴は、エア・パワーがそれらの効果を上げる相対的能力において、地上部隊の要素を陸上でも海上でも追いついた。これはステルス性、精密、情報能力などエア・パワーが最近獲得した優位性だけではなく、そのスピード、範囲及び柔軟性における不変の特徴の結果である。現在、そして今後の航空力を投入する選択肢は、戦域司令官に安全な地域から敵の反撃を受けずに敵軍と交戦し、無力化することを約束し、さもなければ直接敵の部隊と戦い多くの負傷者を出す危険がある米国兵への脅威を緩和する。これらの選択肢はさらに、統合作戦の初期段階から敵の主要な弱点を同時に攻撃し、衝撃を与え、戦略的效果を上げる潜在的戦力となる。

前述した米国の航空・宇宙システムの意味と潜在力を考察した航空関係者やその他の者は、現在起こっているのは統合作戦における進展よりも、作戦と戦力における技術主導の変化であると主張する。B-2 や F-117 などの深攻作戦のプラットフォーム及び全天候下で敵の戦車や装甲車を発見し標的とする JSTARS などのセンサー・システムにより、米国の攻撃航空戦力は、現在、地上の脅威に安全な地域から対処できる状況にあり、敵陸上部隊と敵の反撃による致死範囲内で交戦しなければならない米国の陸上部隊に対する大きな脅威を軽減することは言うまでもなく、陸軍の至近距離攻撃システムの仕事量を軽減している。航空兵はこれらの新戦力の観点から、米国エア・パワーの継

²¹ 以下に述べる結論的な考察に関しては、Benjamin S. Lambeth, *The Transformation of American Air Power*, Ithaca, New York, Cornell University Press, 2000 を参照。

続的發展を導く唯一の原則があるとすれば、地上での接近戦や人力集約的な戦闘方法よりも、人命を尊重し、戦闘指揮官に実効的かつ責任ある戦力投入方法を与えることであると断言する。

確かに、米国のエア・パワーがこれらの發展により米国独自で戦争に勝つことができると主張することは、偏った概念であるだけでなく、大きな間違いである。前述の考察はそれとは全く反対で、米国のエア・パワーは地上及び海上戦力の加担がなくても国家目標の達成が可能であると主張するものではない。さらに、前述の考察は米国のエア・パワーがあらゆる状況においても、米国のランド・パワーやシー・パワーより必然的に重要であることを示唆するものではない。米国の各軍は「イラク解放作戦」で同じように重要な役割を果たしたという事実は、あらゆる戦闘手段において強力な米国の軍隊を引き続き必要とすることを証言している。

しかし最近の進展は、米国の他の軍と比較した米国のエア・パワーの相対的潜在戦闘力を劇的に増強した。そしてこの事実により、新しい作戦構想を統合作戦へ適用することができるようになった。大規模戦域戦争における成功は以前と同様に、適切に統合された形による全軍の参加を引き続き必要とするが、新しい航空宇宙戦力により、敵部隊に対し以前よりもさらに迅速かつ効率的に作戦を展開することが可能となった。このことを考えると、米軍全体の長所は現在、あらゆる種類の配備された敵部隊を撃破する責任の大半を遂行する潜在力を有し、このことによりその他の軍は、最小の困難、努力と代償で目標を達成することが可能とすることができる。そのこと以上に、エア・パワーは、戦闘プラットフォーム、兵器、そしてこれらを展開する機動力に加え、監視と偵察などの重要な付属物も含む最も広い意味で、これまで他の軍が多大な代償とリスクで遂行してきた任務を遂行するその能力により、米国が次の 20 年間に生じる大規模戦争を最良の形で戦う手法を根本的に変えてしまった。それらの中で最も代表的なものは、敵の陸軍を最小の友軍の死傷者で無力化する能力と戦闘の初期段階から戦略目標の前提条件を決定する能力である。これらの能力の結果、航空宇宙戦力は現在、拡大を続ける戦域戦争の状況の決定要因である。このことは、大規模戦争の将来的な状況における米国の陸上戦力の主な役割は、勝利を「達成」することよりも、勝利を「確保」することにあることを意味する。

1980 年代中期以降の米国のエア・パワーの変革がもたらした最も重要な利益は、友軍の状況認識を高め、敵にはそれを拒否することであった。前に言及した空中・宇宙配備 ISR の能力は現在、統合作戦における指揮機関の戦闘空間状況に関する知識を大幅に向上した。この情報の優位性は、目標捕捉能力における急進展を引き起こし、そしてこの能力が高精度攻撃システムと関連して、米国の独特かつ強力な戦力増強要因となった。実際に広域にわたるセンサーの統合は、米国のエア・パワー領域における他分野の技術

進展よりもさらに重要である。その理由は、現在、米軍の各軍に入手可能になりつつある新しい義務的選択肢から最大の価値を引き出す上で必須の前提条件であるからである。これがもたらす意識強化により、情報と精密攻撃能力のこの相乗的な統合は、戦術分野で任務を果たす個々の射撃手から最高幹部まで、指揮系統の上から下までの戦士の能力を高める。

強調すべき2番目の利益は、以前には不可能だったことを遂行し、統合軍のためにより多くの任務を少ない資源で達成するエア・パワーの幅広い能力である。前者の点では、エア・パワーは敵の領土の中心で航空優勢を維持し、飛行、進入禁止区域を強制し、敵陸軍と比較的に安全な範囲内で交戦する能力を証明した。後者の点では、情報指向性の増強により、サイクル時間が短縮され、これは作戦速度を高めることにより、小部隊を外見上より大きな部隊に見せる1つの戦力増強要素である。米国の最新世代の軍用機は信頼性と整備性の面で著しい改善を示し、少ない機数でより強力な戦力を実現する。このような増強は、さらに強力な戦力の集中し、作戦任務を遂行する上で必要な時間の短縮を実現する。

米国のエア・パワーの最近の改善がもたらした第3の利益は、戦闘の開始段階からの状況管理で、これは最初の攻撃が戦争のその後の経過と結果を決定するほど重要である。エア・パワーは、人命、部隊そして国家予算の膨大な代償が伴う戦術レベル、作戦レベルから戦略目標までの系統的な足取りの典型的な順序ではなく、同時性により戦略目標を達成する。このことは、ジュリオ・ドゥーエや彼の追従者などのエア・パワーの古典主義者が予想したものとは大きく異なる。今日の米国のエア・パワーは敵の戦争遂行能力の早期破壊、あるいは無力化をもたらす能力を有する。しかし重要な目的は、「戦略爆撃」の支持者が思い起こさせるリーダーシップ、インフラ、経済力などの聞き慣れたものではない。それらの目的は、敵の配備された部隊と組織的行動力を構成する重要な戦力を目標とする。やがて最初の攻撃は、秘密裏に行われるだろう。例えば、敵のコンピューターシステムに侵入することで道筋をつけ、そこに火と鉄による兵器が続くのである。

最後に米国のエア・パワーの変革は、安全な距離からの敵への絶え間ない圧力を維持し、出撃ごとの戦果を高め、ほぼゼロに近い意図せぬ被害での選択的攻撃、対応時間の大幅な短縮、そして、少なくとも潜在的に、敵部隊をコントロールする機能の完全な停止を実現させた。繰り返すが、これら利益やその他の利益は、決して地上部隊の多目的代替物になるものではない。しかし、このような作戦により、米国の戦域指揮官は、深攻作戦を遂行する統合作戦の大部分でエア・パワーに依存でき、そして友軍が初期段階の接近戦を計画する必要性にピリオドを打つことを暗示する。米国のエア・パワーの変革による最大の成果は、人命の犠牲を最小限に抑える能力である。例えば、精密技術に

よる敵戦闘員の死傷者の削減と人的資源を代替する技術による友軍の人的被害の削減、そして、敵部隊の弱体化した戦力により、陸上部隊が大きな抵抗なしに任務を遂行できる戦闘条件を作ることなどである。

これまでに検討した主要点を要約すると、近年、米国エア・パワーの特徴が収束され、唯一無二ではないとすると、米国を世界の主要な「エア・パワー国家」として呼ぶことが可能になった。それらの特徴には、重要性の順序ではないが、以下の無形・有形の能力が含まれる。

- ・大陸間爆撃機
- ・グローバル攻撃を維持する給油部隊
- ・集中戦力として展開できる波状的航空母艦
- ・宇宙優勢
- ・完全デジタル化・相互接続部隊
- ・それ自体が兵器システムとなる航空作戦センター
- ・オペレータの優秀な能力と技量

これらの米国特有のエア・パワー能力に基づき、以下の米国独自の作戦の質と能力を実現した。

- ・グローバル・リーチ、グローバル・パワー、グローバル・モビリティ
- ・攻撃からの自由と攻撃する自由
- ・情報、監視、偵察（ISR）の普及による状況認識の優勢
- ・戦域攻撃における陸上基地からの独立
- ・敵に気付かれない目標接近とステルス攻撃
- ・昼夜・天候を問わない常時正確な目標攻撃
- ・敵に圧力を加える能力の維持
- ・時間依存目標攻撃を定期的に遂行する能力
- ・付随的被害を日常的に回避する能力

米国のエア・パワーの戦闘能力が有するこれらの能力と関連する発展は、過去 20 年で徐々に集約されてきたもので、米国の新しい戦争の手法を可能にし、まったく新しい形の作戦構想を可能にした。精密技術、ステルス技術、そして情報入手の拡大などの結果、米国の航空関係者は、エア・パワーの最初の主唱者が初めに予測したようにエア・パワーを行使できるようになったが、皮肉なことに、その方法は主唱者が予想もしなか

った方法である。このことはおそらく何よりも、米国が世界の舞台での新興「エア・パワー国家」と呼ばれる基本的理由であろう。